第41回児童生徒読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■中学校1年生の部　最優秀賞

戦争はあってはいけない

弟子屈中学校　畠山　颯太 君

この本は、広島の被爆者の一人である宇根利枝さんという人が体験したことを書かれた本です。

僕がこの本を読もうと思った理由は、歴史の教科書に載っている重大な出来事だし、戦争のことを詳しく知りたかったからです。

一九四五年八月六日に広島に原子爆弾が落とされ、利枝さんは被爆しました。そのときに、体じゅう火傷（やけど）で皮膚が垂れ下がっていた人に利枝さんは水を飲ませませんでした。なぜなら、水を飲ませると死んでしまうので、それが恐ろしかったからです。被爆者は結局のどが渇いたまま苦しんで死んでいきました。利枝さんは、それなら水をたくさん飲ませてあげたかったと後悔し、慰霊碑への献水が始まりました。もし自分が利枝さんだったら、わからないで被爆者に水を飲ませていたと思います。でも本当にその場所にいなければ、僕がどういう行動をしていたかわかりません。水をあげないで逃げていたのかもしれません。それは本当に体験した人でないとどんなに悲さんだったかわかりません。でも体験した人が戦争の悲さんさを伝えていくことが大切だと思いました。利枝さんは、語りべの依頼を引き受け、修学旅行の生徒に戦争の話を伝えました。僕がすばらしいと思うのは、原爆を体験していない人に、戦争の話をして戦争を二度と起こさないように嫌な記憶をすべて話しているところだと思います。語りつがれることがどんなに大事なのかがよくわかりました。

今は、戦争を体験した人たちが高齢化などで亡くなっていったりして戦争を知らない人が増えています。僕もその一人です。僕のひいじいちゃんは戦争の体験者です。戦時中は無事だったけど、終戦後にはシベリアの捕虜になってしまいました。ひいじいちゃんは、自分の体験を本にして、僕の家にもくれました。内容はシベリアで強制労働させられてどれだけ辛（つら）かったかなどが書いてあります。今は釧路にいます。僕は身近に戦争を体験したひいじいちゃんがいます。今度釧路に行ったらそのひいじいちゃんに戦時中や戦後のことを詳しく教えてもらいたいです。僕のひいじいちゃんのように戦後苦しんだ戦争の体験者もいます。

戦争で悲さんだったのは、広島や長崎の原爆投下だけではありません。東京大空襲だけでもありません。日本のすべての戦争だけでもありません。世界で起きたすべての戦争を指すものだと思います。生き残ったのに、利枝さんのように何かを悔いたり、生き残ったことを恥じたり、戦争が終わって七十年たつのにいまだに苦しんでいる人もいます。僕がこの本を読んで強く思ったのは、戦争の悲さんさをほかの体験者からも詳しく学んでいきたいということと、それによって僕も誰かに伝えていきたいということです。そして、今僕の周りにいる友達や家族を大切にしていきたいです。今僕ができる平和への一歩だと思うからです。

（寸評）
登場人物の戦争体験をとおして、それを自分の身近な問題としてとらえ「戦争」そのものをとても深く掘り下げています。誰もが悲惨で愚かな行為と思うこの戦争を曽祖父のシベリアでの強制労働の体験も入れながら、戦争未体験の自分自身の立ち場を客観的に見つめ、そして何をなすべきかがはっきり述べられています。その中でとてもすばらしかったのは「戦争」を「世界全体の問題」としてとらえ、風化させることなく「語り継ぐ」ことが大切だと考えていることです。畠山君自身が曽祖父の体験談をどこかで話す「語り部」の一人であってほしいと願っています。

書名『夏の花たち』　鈴木　ゆき江　著

■中学校2年生の部　最優秀賞

生きることの大切さ

川湯中学校　石川　瑠望 さん

この物語は、一人の青年が、変わったアルバイトをする所から始まりました。

それは、刑務所の看守なのですが、普通の看守ではなく地下にいる受刑者の女の監視ととなりの部屋にあるモニターに映る画面を観察するという仕事でした。モニターに映っているのは、日本ではない場所に一人の大人と15才になる子供4人しかいない「ミン村」という所で、そこは半径3㎞以外は無数の地雷がうまっている危険地帯なのですが、そこへ出なければ危険はない所でした。

私は、なんでミン村という所に無数の地雷がうまっているのかなと思いました。

子供の一人が、受刑者の女の子供で、産まれた時からその女の刑が執行されたのです。その女の所にも、テレビがあって危険な場所で育っていく自分の子供をただ見ていることしかできない、子供になにもしてあげることが出来ないという苦しみを味わうことが、刑だったのです。それは15年間という期間で、あと一ヶ月ほどで刑が終わる時に青年が女の刑が終わるまでの一ヶ月間、アルバイトで看守として、来たのです。最初は、ただモニターを見ているだけの毎日でしたが、始めてから、15日ほどたったころに、ミン村のおじさんが15才になった子供たちに、自由に生活している日本の子供たちの映像を見せ、地雷たん知器の使い方、地雷の除去の仕方を教えて、この場所を離れ、日本に帰れることを教えました。

私は、このおじさんがすごい優しいなと思いました。

そして、今までは、この生活があたりまえだった子供たちが見たこともないゲームで遊んだり、道を自由に歩いている日本の子供たちを見てしまったので、自分たちも、日本に帰って、思いっきり、自由に生活したいという気持ちがめばえて、四人はミン村を出ることを決心します。

私は最初、この本を読んだ時、ずいぶん現実離れした話だなと思いました。だけど、読んでいくうちに、だんだん引き込まれて、青年の「こんな刑があるなんて、理解できない」という気持ちだったり、受刑者の女の人の、「自分の子供を危ない目にあわせたくない」という気持ち、子供たちの「まだ見たことのない、知らない事だらけで、だけど子供たちが見た、ゲームで遊んだり、道を歩いている日本の子供たちを見て、今よりも、絶対に楽しいと思う日本に帰りたい」という気持ちなど、色（いろ）んな場面での、色んな人物の気持ちを考えながら読んでいました。

私は、この本を読んで思ったことは、私たちの暮らしている日本は、何でもあって、不自由のない生活ができるけど、世界のどこかでは、まだ、戦争とかしていたり、地雷の恐怖におびえて、生活している人たちが、たくさんいるということです。お腹いっぱい、食べるだけの食料がなくて、なくなっちゃう子供がいると思います。食料だけでなく勉強したくてもできない子供たちや学校で勉強するのに何時間もかけていく人や、危険な所でも行く人がいます。

私に、何ができるかは、わかりませんが、一日でも早く、まずしい国とかが少しでも豊かになって、恐怖のない、世界中のみんなが、心から笑顔で暮らせる日が来たらいいと思います。

書名『モニタールーム』山田　悠介　著

（寸評）
非現実的な内容の物語ですが、石川さんは登場人物の気持ちを考えながら、それを現実のことにつなげることによって自らの生き方の有り様についてまで発展させています。生きることが難しいとされている現在、人は互いにたくさんの人に支えられて生きています。しかし、その中には成育環境の劣悪さから日に三度の食事を食べられない子、初めて見る自分のバースデーケーキを食べることができず、ただ見つめている子など、さまざまです。この本を読んで感じたこと、考えたことをいつまでも忘れずに周りの人たちにも伝えていってほしいと思います。

そのほかの最優秀作品についても、来月以降順次紹介していきます。
※生徒の学年は、コンクールが行われた平成27年度当時のものです。